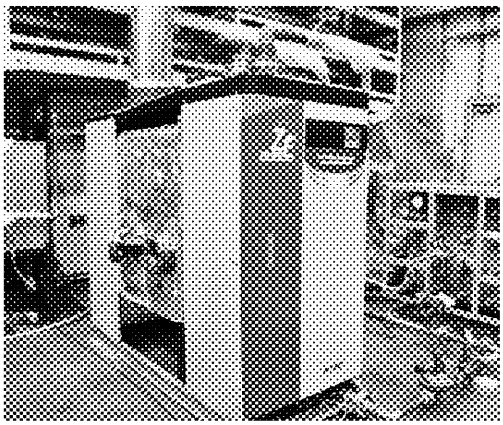
水素対応製品を拡充

日本サーモエナー タンク・供給設備新設

日本サーモエナー（東京都港区、泉雅彦社長）は、関東工場（茨城県阿見町）内に貯蔵容量900立方㍍の水素タンクや供給設備を新設し、4月の本格稼働を目指す。主力の真空式温水機や小型貫流ボイラの燃料は現在、重油やガスが主流。脱炭素社会の到来を見据え、水素燃料対応の製品群拡充に向けた開発を加速する。

日本サーモエナーは2023年に出力349キロワットの水素専焼の真空式温水機、24年に水素混焼率が最大20％の小型貫流ボイラを発売した。26年度までの3カ年中期経営計画期間中をめどに、水素専焼真空式温水機の出力帯の製品拡大や、水素混焼への対応、水素専焼の小型貫流ボイラなどの開発を目指す。



京都工場では貯蔵容量が最大280㎥の水素カードルを設備し、水素燃料対応の製品開発を行っている

現在は京都工場（京都市南区）で貯蔵容量が最大280立方㍍の水素カードル（ガスボンベを連結する機器）を使って研究開発している。建屋が古く、設置スペースが限られていたため水素の貯蔵容量を増やすことが難しかった。

関東工場に京都工場の約3・2倍の貯蔵容量900立方㍍の水素タンク、供給設備を導入し、開発スピードを上げる。水素以外にアンモニア燃料への対応も検討する。

同社は工場や宿泊施設、ホテルなど向けの真空式温水機や小型貫流ボイラが主力。水素以外に、木質チップ燃料のバイオマスボイラや電気ボイラ、ヒートポンプ給湯器と真空式温水機を組み合わせたハイブリッド給湯システムなども手がける。

30年までにこれらの脱炭素関連事業の連結売上高に占める比率を現在の数％から15―20％に拡大したい考え。メタネーションの普及により、都市ガスの脱炭素化が進めば既存製品で対応できる一方、「何が本命になるかが分からない状況の中、あらゆる可能性に対して準備していく」（京都工場技術統轄本部技術本部の三浦智郎開発部長）方針。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社